

# 佛典の文化史的意義

善 波 周

まえがき

さいきん、佛教の研究について、とくに二つの注目すべき傾向が見られる。その一つは佛教の社會實踐面におけるそれであり、他の一つは、佛教が社會科學の一部門として世界的に廣く取りあげられつつあるということである。もちろんこの二つとても従來からしばしば口にされて來たことではあるが、それがいよいよ顯著に、しかも具體的に指摘されるようになったのが現代であらう。しかも、佛教が個の救済にあることは云うまでもないとしても、その個が單なる個に止まりえなくなりつつあるのもまた現代の一つの課題でなければならない。

だが、それとは別に、あくまで純粹な學問的立場からの佛教研究というものもまた存在するはずである。しかもそれは決して生の殘骸ではなく、ある意味では、むしろより本質的な佛教の根本義に連なるものでさえありうるのである。

本稿は、そうした立場からの一環として、一見、佛教とはすこぶる縁遠いもののように見える自然科學などの分野においてさえも、佛典、とくに漢譯佛典が、文化史的に如何に大きな意義をもつものであるかを、以下少しく論述して見たいと思う。

まずわれわれが、いわゆる佛典と稱せられるものに接して、そこに佛教の本質とはあまり關係のなさそうな、たとえば天文曆數、あるいは占星というようなもののかなり見出すのであるが、それらは佛教の立場から如何に解すべきであろうか。そしてまた、それは果して如何なる意義をもつものであろうか。

わが國における星祭りとか、星廻りなどと云われるものは、もちろん中國の五行思想などにも大いに影響されているが、もともとその大部分は、佛典を通してわが國に傳來されたインド起源のものが主流をなしている。すなわち、インドではすでに紀元前十三世紀頃には、昴宿を始めとする二十八宿が正しく觀測されていた形跡があり、現行の二十八宿と同じものがアタルヴァ・ヴェーダにも列擧されている。しかしこの二十八宿の制度というものは必ずしもインド・オリジンはではなく、より古い時代に、おそらくバビロンあたりで發見されたものが、アーリヤ人の東進とともにイランを通じてインドに傳えられたものであろう。そしてそれがインドの地において、やがて獨自の發達を遂げたこともまた事實である。人々は黃道に沿った顯著な恒星群、すなわち二十八の星宿を指標として太陽や太陰の運行を觀測し、そこに曆法を見出したのである。

フランスの J. Filiozat 教授はインドの天文曆法に深い造詣をもち、インドの曆法は、古いヴェーダ曆と、ギリシヤの新らしい天文學がインドに入ってから紀元六世紀以後の二種類あることを指摘している (*L'Inde Classique, vol II*) が、それだけでは佛典中に出てくる天文ならびに曆日に關するすべての記事は完全には説明しえない。ところが漢譯佛典中に、摩登伽經というのがあり、これには異譯やサンスクリットの原文、またチベット譯もあるので、それらを詳細に檢討することによって、前記二曆の中間（ほぼ紀元前三〇〇年から紀元後五〇〇年）に、ヴェーダ曆を第一期とすると、それに續く第二期の曆が存在していたことが明らかになり、それらによって始めて、今まで説明

のつかなかった佛典中の天文曆法の記事も矛盾なく説明されるのである。

しからばどうして、そうした曆が存在しなければならなかったか。

周知のように、春分點は七十二年には一度移動するので、従つてたとえば、どの星に春分點が合したというような記事があれば、それは現代の精密天文學によつて逆算し、その觀測された年代をほぼ知ることができる。ところがその春分點は、數百年もたつと移動して次の星座に移り、従つて月名もまたそれに應じて調整されなくてはならない。かくてそこに新たな曆が登場してくるわけである。しかも漢譯佛典は、そうしたインドの曆法記事を翻譯する際、その時代々々の中國自體の曆にあてはめて譯している場合が多いので、そこに少なからぬ混亂が生じてくる。その好例としてわれわれは佛誕日のそれをあげることができる。

## 二

わが國では現在、降誕會を太陰曆に關係なく新曆の四月八日にあてているが、南方佛教徒は、降誕、成道、涅槃のそれを一律にウエーサカ月の滿月の日との傳承に従っている。一方、過去現在因果經などには、二月八日の日出時に出生されたとの記事がある。とすると、そのいずれが正しく、またそうした混亂は何故に生じたのであらうか。

まず、ウエーサカ月の滿月説であるが、これは五世紀頃の作といわれるジャータカ・ニダーナにも出てくるが、大唐西域記は佛誕日を、「以吠舍佉月後半八日、當此三月八日、上座部則曰、以吠舍佉月後半十五日、當此三月十五日」とわざわざ當時の中國曆にも換算しているが、これを前記インドの第二期の曆によつて見るに、ウエーサカ月はまさしく晝夜等分の春分の月に當り、しかもその半パクシャ（一パクシャは十五日）の差は、後者が年代的にやや古い觀測に基いていることを示している。次に二月八日説は、マハーヴァスツなどにも出てくる「月が鬼宿に合した滿月の夜」と同系統のものであるが、その漢譯である佛本行集經には、「於彼春二月八日、鬼宿合時……」とあり、こ

の二月八日とは彼春、すなわちインド曆の春、しかもこれが譯されたのは六世紀であるから、その曆は角月を年初とする第三期の曆によったのであり、それによると、春第二月はまさしくウェーサカ月に當っている。

ところで四月八日説は、佛典中にも一番多く出ており、たとえば佛所行讚などにも、「時四月八日、菩薩從右脇生」とはつきり書かれている。しかし月名をこうした一連番號で呼稱するのはインドでは絶対になく、たとえば吠舍佉月（サンスクリットでは *Vaiśākha*、パーリ語では *Vesākha*）というような個有名詞を用いるか、あるいは一年を春期、雨期、冬の三期にわけて、春の第二月というような数え方をする。だから單に三月とか四月というような月名は明らかに中國曆にあてはめて譯している證左であり、しかもそれらはすべて太陰曆によっているのである。どこでいま宿曜經などに出てくる中國の傍通曆を見ると、中國の四月十五日はまさしく氏月（ウェーサカ）の満月の日となっている。中國では古くから冬至の終った時を年初としているので、従って四月八日はちょうど春分のころに當っている。

このように佛誕日の三説は、一見、如何にも異説のように見えるが、實はそれらがそれぞれの曆によつて正しく記述され、あるいは換算されただけのものであり、日時的には決して異日ではなく、すべてが春分の日に歸一される。しかも一方、月が鬼宿(*pūṣya*)に合したというのも、この *pūṣya* は阿育王碑にも出てくる *Tissa* 星座の日と言語學的に通ずるものがあり、古くから吉祥日とされていた。しかもインドの古い傳承には、春分を最も吉祥の日としていた記事がしばしば見られることから推しても、古代インド人にとっては、もともと佛陀が何月何日に生まれたといううな時間的日時は問題でなく、とくに當時は實際に星によつて日時を算定していたのであるから、たとえば、キリストの誕生に當つても、東方の學者たちが星を見て、その運勢を豫言したように、尊い人は尊い星のもとに生まれるという古代人の人生觀が、佛誕日を最吉祥日たる春分の日に結びつけ、それが年代を経るとともに、曆法的に異説を生じたわけである。従つてわが國における新曆の四月八日なども、佛誕日としては科學的には何ら眞實性をもつもので

はなく、あくまで便宜上のものであることは否定できない。しかしながら、この事實をもつて直ちに非科學的であるとか、非歴史的であると非難することは、むしろ古代人の生きた眞實を無視するものであり、それは文化史的にも決して正しい見解ではない。

### 三

次に、東西文化の交流史上から、最も具體的な天文曆法、あるいは占星というようなものが、文化史的に如何なる役割を演じているかを少しく指摘して見たい。

さきにも觸れたように、おそらくバビロン附近で發見されたであろう天文智識は、一方ではインドに入つて獨自な二十八宿などの制度を確立し、それが密教などとも結びついて民衆の生活に根をおろし、一方ではギリシャに入つたそれは極めて科學的に發達し、現行の七曜や西洋占星術の基礎となつて十二宮などをも生み出した。だがそれは五世紀以前のインドの文献には全く見られず、それ以後になつて急速にインドに入つて來た。そしてそれが中央アジアを経て佛典の中に數多く現われてくるのであるが、そのよい例をわれわれは八世紀に書かれた宿曜經二卷に見るのである。

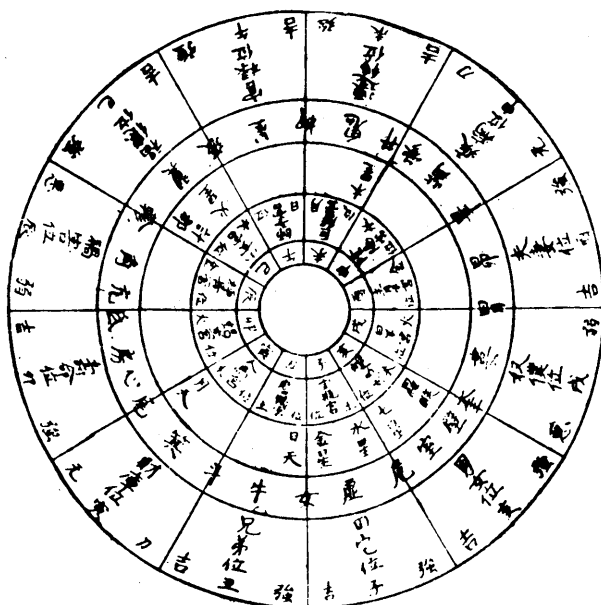
この宿曜經は唐の不空三藏の譯とされているが、その内容から見ても、それは一つのまとまつた原本からの譯とは思えず、おそらくそれまでに流通していた天文占星の智識を不空が蒐集編纂したものと考えられる。すなわち、それはインド在來の二十八宿に關するあらゆる智識と、ギリシャ的七曜ならびに十二宮との完全な融合である。しかもその七曜名にサンスクリット、ペルシャ、ソグド語の音譯が載せられている事實は、それらが如何なる經路をとつて傳えられて來たかを雄辨に物語っている。そしてほぼ同時代の一行禪師もインド並びに中國の天文曆法を善くし、多くの密敎的著作を残し、また一方では純粹に科學的な大衍曆五十二卷を著わしている。

ところでわが國で編纂された「續群書類從」をひもどくと、その卷第九百八に「宿曜運命勘錄」というのがある。これはその時代に生まれた人の運勢を説明したものを集めたものであるが、その中に円形の圖表があげられている。これはホロスコープと云われるものであるが、それを見ると円形の中に、二十八宿、十二宮、七曜、十二支を組み合わせ、その一番外側に、壽命位、禍害位、福德位、官祿位、遷移位、疾病位、夫妻位、奴僕位、男女位、田宅位、兄弟位、財庫位の十二が配列されている。これはインドの文献では全く見られないものである。

ところが、九世紀にパフラビー語で書かれたブンダヒシュン(Bundahishn)という書物に、計らずもこの十二位があることが最近わかった。これについては一昨年、D. N. Mackenzie 著「ブンダヒシュンにおけるゾロアスタの占星」と題する一文で、この部分を英譯して紹介しているが、原本のパフラビー語のホロスコープを見ると、それは完全な四角形であり、そこに七曜とこの十二位が組み合わされている。ところでギリシャのホロスコープはすべて四角形であるが、インドでは殆んど円形である。とすると、この十二位はその形の上から見てもギリシャ系のものでなくてはならない。しかも九世紀にそれがイラン地方において知られていたのを、誰かの手によってインド傳來の二十八宿、七曜、十二宮、および中國の十二支をも入れて完全にインド式の円形に組み合わされ、それがわが國にも傳っているということは文化史的に見て頗る興味あることと云わねばならない。

また、ブンダヒシュンには宇宙説も説かれているが、そこには六州に圍まれた Terag 山というのがあり、太陽は三百六十の窓から出入するとあり、インドの須彌山説とすこぶる似ている。これは果してブンダヒシュンがインドの影響をうけているのか、それとも、より古い西方の宇宙説がインドに入ったのか、そうしたこともアミダ佛の西方起源説などとも考え合わせ、興味ある今後の問題でもあらう。

本命辰壬辰神。  
本命宿尾宿。  
本命宮蠍虫宮。

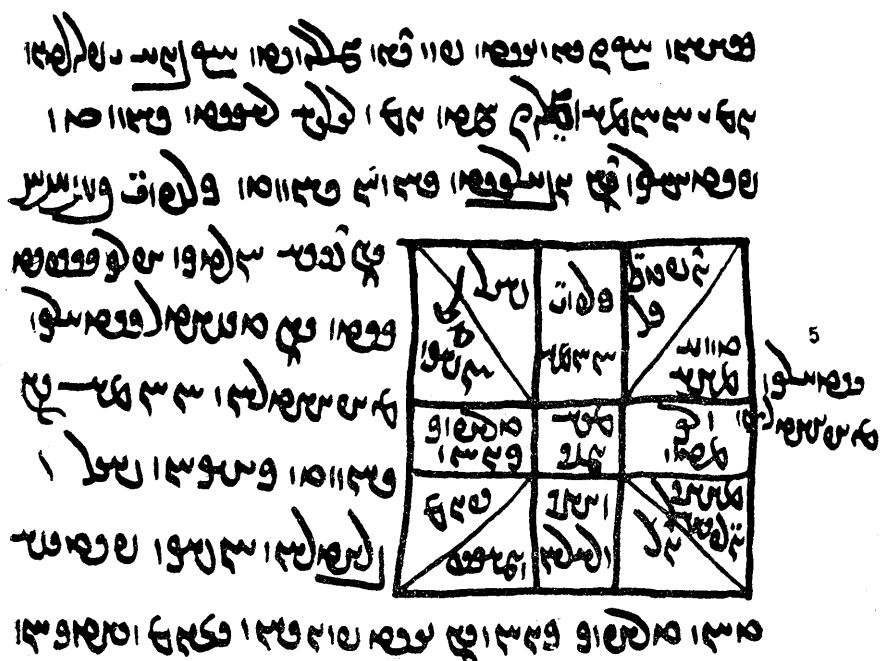


ブンダヒシュン本文の十二位 (譯)

奴 僕 位		官 禄 位
兄 弟 位	壽 命 位	福 德 位
田 宅 位		夫 婦 位
男 女 位	禍 害 位	遷 移 位
財 庫 位		疾 病 位

ブンダヒシュン（パフラビー語）のホロスコープ

Bupdahisp ed. T.D.Apklesaria



ブンダヒシュンのホロスコープ（譯）

獅子座 水星 乙女座	蟹座 木星	双子座 牡牛座 月
天秤座 土星	(天頂) (大地)	羊座 太陽
蝎座 ケンタウルス	山羊座 火星	奥座 彗星 水瓶座



このように、佛典そのものの中に、あるいはそれに關連したもののの中に、文化史的立場から興味ある數多くの問題を見出しうるのであるが、醫學に關しても同じようなことが云える。

インドには、チャラカ本集とスシュルタ本集という二大醫書があり、それらは紀元一、二世紀あるいはもう少し後のものと推定されているが、そのチャラカはこれをアートルैया師から傳授されたと述べている。ところが釋尊の時代に、王舍城に耆婆(Jivaka)という名醫があり、若いころ彼はタキシーラに遊學してアートルैयाから醫學を習ったということが、パーリ語のマハー・ヴァッガに出ている。しかしこの二人が同一人であるかは不明であるとしても、少くともチャラカ本集が遠く釋尊時代のアートルैया家の流れをくんでいることだけは確かであろう。ところでいま漢譯の「四分律」をパーリ語のそれと比較すると、そこには物語りの上とか醫療上などにもかなりの異同が見出され、當時の社會事情などを知るのに大いに興味あるものがある。

たとえば四分律によると、彼は阿提梨(Ātreya)のもとで醫道を成じて歸國するや、瓶沙王(Bimbisara)の侍醫となったが、王は佛陀に深く歸依していたので、自分と佛陀、それに比丘僧と特別な國王長者以外の者には、彼の診療を許さなかったのだので、民衆の中にはそのためになぎ／＼佛道に入つた者もあつたという。また彼は外科手術なども度々行つてゐるが、そこには病人の心理を捉えた醫師としての頭のよさや、時にはユーモアに富んだ治療法なども出てくる。

その一、二をあげると、瓶沙王がひどい痔疾にかかったとき、パーリ文では、彼は手術をせずに藥を塗つただけでそれを全治させたとあるが、漢譯の方はなか／＼詳しく、まず王をぬるま湯に入れて次第に眠らせ、知らぬ間に利刀をもって患部を切開して治している。ところがそうした手術について、四分律の藥健度を見ると、この耆婆が比丘の

大小便處および兩腋下の病を手術して治したのを世尊が知って、これを醫學的に非難しておられる。ところがパリ語の方は、痔を手術したのは耆婆ではなく、アーカーサゴッタという醫師になっている。佛陀はこれを叱り、密處は皮膚が柔軟で傷が治りにくいというえに刀も用いにくいので、密處の圍り二指のところに刀法を行うことを禁じ、これを犯すものは偷蘭遮罪に墮すと誠にめている。ところが佛陀自身が病氣になられたとき、耆婆はこれを診察して下劑の必要を感じたが、佛陀には普通の下劑は差しあげられないので、とくに三種の華に藥をまぜて次々にこれを嗅がせ、最後に風呂に入れたところ、佛陀は前後三十回も下劑をして全治されたという。

またチベット所傳のものには、次のようなユーモラスな物語りもある。すなわち、かの惡名高いアジャセ王が惡質の腫物になやんだとき、王はどうしても手術を肯んじないので、一大ショックを與えて膿を出すよりほかないと考えた耆婆は一計を案じ、王に對して自分の王子の肉を食えば治ると云ったところ、王はそれを承知したので、ひそかに別の肉を持ち來つて王に差し出し、まさにそれを食わんとした王に對し、「先には父を殺し、今またわが子の肉を食わんとするか」と激しく罵ったところ、王は激怒して腫物が破れ卒倒した。耆婆はその間にこれを治療し、あとでは王にほめられている。

こうした一見たわいもないような物語りの中にも、われわれは當時の醫學智識、社會事情というようなものをうかがうるのである。しかもそれらの原本あるいは異説というようなものも、これを文獻學的に、あるいは文化史的に取りあげるることによって、そこに興味ある多くの問題を見出しうるのである。とまれ、ぼう大なる漢譯佛典中には多種多様の要素が充滿しており、それは學問的にまさに無盡藏の一大寶庫であるとも云えるのである。それを各分野から有効に活用することは、少くとも漢文を讀めるわれわれにとって、それは一つの特權でもあり、また義務でもあると云わねばならない。